

ヘブル人への手紙1章1-3節「さらにすぐれた方」

1A - ヘブル人に対する手紙

2A 神のことば 1-3

1B 預言者によって 1

2B 御子によって 2-3

1C 万物の相続者 2

2C 神の本質の現われ 3a

3C 罪のきよめ 3b

ヘブル人への手紙を学びます。今日のメッセージ題は、「さらにすぐれた方」です。

1A - ヘブル人に対する手紙

この手紙に入る前に、私たちがこれまでずっと学んできたことをおさらいしたいと思います。私たちは、ずっとパウロによる手紙を読んできました。使徒行伝には、13章にあるアンテオケの教会からバルナバとパウロが遣わされて以来、異邦人に対する福音宣教の記録が書かれていました。そしてローマ人への手紙から、主に、異邦人向けのメッセージとなっていました。福音はユダヤ人をはじめ、異邦人にも救いを与える神の力であり、キリストにあつて、ユダヤ人と異邦人が一つになり、一つのキリストのからだに連なっています。神の恵みによって、信仰によって私たちは救われます、割礼を受けて、モーセの律法を守らなくても、異邦人は異邦人のままで救われます。パウロは、異邦人に福音を宣べ伝える使徒として召されており、異邦人が多い、小アジアとヨーロッパの諸教会に手紙を書きました。

けれども、このヘブル人への手紙は、その手紙の題名のとおり、ヘブル人すなわちユダヤ人への手紙になっています。ちなみに、ヘブル書の後にあるヤコブの手紙も、「[国外に散っている12部族へあいさつを送ります。](#)」(1:1)と書いてあり、ユダヤ人を主に意識した手紙となっています。同じように、ペテロの手紙も、離散しているユダヤ人信者を意識しています。

そこで、使徒行伝の初めのほうにある記録を思い出してください。主がユダヤ人の弟子たちに対して、「[聖霊があなたがたの上に臨まれ、力を受けます。](#)」(1:8)と言われました。そして、彼らが祈っていたときに、聖霊が臨まれましたが、そこはダビデ王の墓の上にある部屋においてでした。集まってきたのは、世界中からエルサレムに五旬節を祝いに来たユダヤ人であり、ペテロは、ユダヤ人たちに、福音を宣べ伝えて、彼らが救いを得ました。そして教会が生まれましたが、そこはユダヤ人たちの集まりでした。そして、使徒行伝2章46節を読みますと、「[毎日、心を一つにして宮に集まり](#)」と書いています。そしてペテロとヨハネは、午後三時の祈りのために、宮に上っていく生活を送っていました(3:1)。このように、彼らは、イエスをメシヤと信じながら、ユダヤ教の中で

生活していました。

そして、また、使徒行伝15章においては、異邦人にモーセの律法を要求しないという決議はなされましたが、彼らが割礼を受けるのをやめ、また他の律法をやめるようなこともありませんでした。これはパウロも勧めていることであり、コリント第一7章にて彼は、「召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくしてはいけません。(18節)」と言っています。そして、パウロがエルサレムに戻ってきたときにヤコブに会いましたが、ヤコブはパウロにこう言いました。「兄弟よ。ご承知のように、ユダヤ人の中で信仰にはいつている者は幾万となくありますが、みな律法に熱心な人たちです。」ユダヤ人たちは、イエスをメシヤと信じていても、なおかつ律法を守り行ない、神殿礼拝もささげていたのです。

しかし、彼らは、ユダヤ教の中で生活しながら、ユダヤ教の中では激しい迫害の中に入っていました。使徒たちがエルサレムで福音を宣べ伝えているときに、むちを打たれたり、牢に入れられたりしました。そして、ステパノが説教をした後に、それを聞いていたユダヤ人たちは彼を石打ちによって殺しました。初めての殉教者です。そのときから、エルサレムとユダヤ地方にて激しい迫害が起こり、ユダヤ人たちは、ユダヤ教の中にいながら、なおかつユダヤ教の共同体からはつまはじきにされる圧力を受けていました。これが、ヘブル人への手紙を読むときに必要な、背景知識です。ユダヤ人信者の中には、この迫害が苦しくて、イエス・キリストへの信仰を捨てて、ユダヤ教の中に戻ろうとしていた人たちがいました。けれども、ヘブル人への手紙の著者は、この信仰の後退について警告を発しています。初めに抱いた確信を最後まで保ちつづけなさい、と勧めています。

そして、ヘブル書の著者は、この苦しみの中において忍耐する力を与えるのは、何よりも、主イエス・キリストを思っていることであることを知っていました(ヘブル 3:1)。主イエスのご栄光が、その人のうちに輝いていればいるほど、人は、直面している困難や悩みにも耐えることができます。そこで、ヘブル人への著者は、イエス・キリストがいかにすぐれているかを、この手紙のテーマとしています。彼は、ユダヤ教の中ですぐれているとされている、三つの事柄を挙げています。一つは御使い(1-2章)、次にモーセ(3章)、そして三つ目にレビ人の祭司制度(5-7章)です。御子イエス・キリストをこれらの事柄と比較して、キリストがさらにすぐれている方であることを証明しています。ヘブル人で、頻繁に使われていることばは、この「さらにすぐれた」という言葉です。英語では better です。例えば、1章4節をお読みします。「御子は、御使いたちよりも、さらにすぐれた御名を相続された」とあります。次に7章の19節を見てみましょう。「…律法は何事も全うしなかったのです。…他方で、さらにすぐれた希望が導き入れられました。私たちはこれによって神に近づくのです。」とあります。さらにすぐれた希望です。そして、8章6節です。「しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。」他にもたくさんあります。御使いも、モーセも、そしてレビ人の祭司制度も、それ自体は神から与えられたものであり、悪いものではありません。けれども、キリ

ストがこれらの良いものよりもさらに良い、優れていることを論証しています。

この手紙はユダヤ人に対して書かれたのですが、クリスチャン一般にも教訓を与えてくれます。まず、この世にある文化や慣習、社会があります。私たちも同じように、自分がクリスチャンになることによって、既存の共同体の中から、つまはじきにされることが多いです。日本には、家制度があります。家を受け継がなければいけないので、先祖の墓を守らなければいけないし、先祖供養も欠かすことはできません。地域社会においても、盆踊り大会やその他、神道関係の行事がもりだくさんです。会社においても、飲み会に付き合ったりして、仕事の仲間関係を保っておかなければいけません。そして、これらの活動は決して悪いものではありません。先祖を尊敬して、家族を大切にすることは、とても良いことです。盆踊りは偶像礼拝ですが、地域ぐるみの付き合いそのものは、とても良いものです。仕事をスムーズにするために、同僚との関係を保っておくことも良いことです。私たちが悩ますのはこれらの元々の意図は必ずしも悪いものではなく、良いものだからです。悪いものであれば簡単に捨て去ることはできるのですが、良いものだから捨てられないのです。けれども、そのような、日本人の中にある共同体を失いたくないと願うばかりに、自分の信仰を表明しなくなったり、他の兄弟姉妹との交わりを持たなくなったり、祈らなくなったりしていきます。それは、ユダヤ人が、自分たちが村八分にされたくないために、イエス・キリストへの信仰を捨てて、ユダヤ教に回帰しようとしたのと似ています。

もう一つ、世にある文化だけでなく、教会の中にある文化という問題があります。このことについては、コロサイ書が詳しく取り扱っています。そこでも、キリストの至上性、この方が万物の創造者であられ、この方が万物の中で第一となられるわけなのですが、教会の中に人間の哲学や、天使礼拝など、知的にも、また体験的にも、かしらなるキリストとの結びつきがある命、また知恵や知識から離れてしまう危険について、パウロは警告しています。私たちの周りに吹いてくる教えの風がそれです。ですから、私たちは、今、主イエス・キリストの栄光を仰ぎ見なければいけません。

ところで、このヘブル人への手紙を書いた人について、聖書学者の間でたくさんに意見に分かれていることを付記したいと思います。多くの人は、著者はパウロであるとしています。手紙の終わりには、こう書いています。「私たちの兄弟テモテが釈放されたことをお知らせします。もし彼が早く来れば、私は彼といっしょにあなたがたに会えるでしょう。すべてのあなたがたの指導者たち、また、すべての聖徒たちによろしく言ってください。イタリヤから来た人たちが、あなたがたによろしくと言っていきます。恵みが、あなたがたすべてとともにありますように。」ヨーロッパにいるパウロが、テモテとともに、ユダヤ地方にいる信者たちに書いた手紙と考えられます。そして、ヘブル書の流れのあちこちに、熱心なユダヤ教徒だったからこそ論じることのできる新しい契約のすばらしさを見ることができます。

2A 神のことば 1-3

それでは、本文を読みたいと思います。今日は初めの3節だけを学びたいと思います。この3節は、ヘブル人への手紙のテーマになっています。すなわち、イエス・キリストの栄光の輝きです。

1B 預言者によって 1

神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。

パウロは、神が、語られる神であることを、ここで紹介しています。私たちクリスチャンにとっては、このことは当たり前のことかもしれませんが、しかし、日本人など異教の神々を拝んでいた人たちにとっては、驚くべき事実です。目に見えない神を信じることは、ある意味で、もどかしいことです。目で見える偶像であれば、これがあれば安心であるという思いを抱くことができます。とくに、目に見えない神を拝んでいる私たちを、その異教徒が見るときに、「お前の神はどこにいるのか。」と問い詰めます。けれども、このことについて詩篇の著者は、非常に面白いことを書いています。詩篇115篇2節から8節です。「なぜ、国々は言うのか。『彼らの神は、いったいどこにいるのか。』と。私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。口があっても語れず、目があっても見えない。耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。」偶像は、目や耳や口、足があるので把握することができますが、けれども、見ることはできず、聞くことはできず、そして語ることはできません。私たちは、この方を見ることはできないけれども、神は私たちを見ておられ、また私たちに語りかけてくださいます。語りかけてくださるので、人格的な関係を持つことができます。これほど幸いなことはありません。

そこで聖書の本質は、「ことば」のなのです。神は天地創造を言葉によって行われました。人を造られたとき、ご自分のかたちに造られましたが、動物と人の区別の一つは、「言語を宿しているか、そうでないか」があります。そして旧約時代の神が住まわれる幕屋、また神殿において、その中心は至聖所にある契約の箱であります。その箱の中に入っているのは、十戒の石の板です。像ではなく、言葉であったのです。

実は、人の人格、あるいは人の霊と言ったらよいでしょう、これは言葉によって成り立っています。私たちが人として付き合いをする時に、私たちの肉体はその霊を表現するために存在しますが、あくまでも言葉を交わすことによって人格と人格の触れ合いがあります。見た目で付き合いをすれば、すぐに破綻することは分かります。だから、私たちは神の言葉である聖書をこのようにして熱心に調べ、知り、そして自分の生活に適用させていくのです。

パウロはここで、昔に神が語られた時のことと、御子イエス・キリストが現われてから語られていることとの対比を行なっています。昔は、まず先祖たちに対して神は語られました。この「先祖たち」とは、イスラエル人のことであり旧約の聖徒たちのことです。そして、彼らは、「預言者たちを通して」語られました。彼らにはアブラハムがおり、モーセがいて、その他さまざまの、神のことばを取り次ぐ人々がいました。彼らは自分たちで勝手に語ったのではなく、聖霊に動かされて語りました。使徒ペテロは、「なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。(2ペテロ1:21)」と語っています。

そして昔は、「多くの部分に分け」語られたとあります。これは、少しずつ、時代を追って、神がご自分の計画を明らかにされたことを意味します。アダムに与えられた神の啓示よりも、ノアに与えられた神の啓示のほうが、詳しくなっています。ノアよりもアブラハムのほうが、アブラハムよりもモーセのほうが、モーセよりもダビデのほうが、神のご計画が明らかにされています。それぞれの時代に分けて神はお語りになり、前に与えられた啓示と知識に基づいて、それを発展させてご自分の目的とご計画を明らかにされました。

このことが分かっていると、神のご計画の全体を知るのに役に立ちます。主は初めに、アダムに対して語られました。「生めよ、増えよ、地に満ちよ。地を支配せよ。」と語られました。その命題に、罪を犯すことによって不従順になりました。そして人類は腐敗しました。けれども神は憐れまれて、セツの子孫であるノアによって、改めて契約を結んでくださいました。ところが、その子孫がバベルの塔によって、神に反逆しました。それで言語を混乱させて、世界に散り散りに住むようにされて、民族が出来上がりました。そして、神はアブラハムを選ばれました。アブラハムの子孫と国によって、アダムに与えられた使命を果たそうとされたのです。子孫が増え、国が強くなり、約束の地に彼らが安心して住むことによって、神の支配を他の諸国民に示そうとされたのです。

そして、モーセによって律法を与えられました。神の命令によって生きる、神の国がイスラエルによって実現するためです。そして、神はイスラエルによるご自分の支配を、ダビデの世継ぎの子によって確立するべく、ダビデに約束を与えてくださいました。しかし、ユダの国はことごとく主に背きました。それでバビロンに捕え移されますが、主はエレミヤを通して、彼らに新しい契約を与えることを約束されたのです。ですから、アダムからノア、ノアからアブラハム、アブラハムからモーセ、そしてモーセからダビデ、ダビデからエレミヤを通して新しい契約が示されました。

そして、「いろいろな方法で」とあります。昔は、多くの人が、神の音声を聞きました。神が直接、音を出して語られた記述が聖書ではたくさんあります。ある人は、夢や幻の中で語られました。またある人は、内なる声を聞きました。ある人は、祭司のウリムとトンミムによって、神のみこころを知りました。このようにして、いろいろな方法で神は先祖たちに、お語りになりました。

2B 御子によって 2-3

したがって、預言者による、神の語りかけということ自体、偉大なことであり、驚くべきことです。これはユダヤ人たちに与えられていた特権であり、祝福です。しかし、パウロは、この預言者による神の語りかけ以上に、すばらしいことばがあることを、ここで明らかにしています。「この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。」とあります。

この終わりの時、御子ご自身が、私たちの神からのメッセージとなっています。主が、ユダヤ人の弟子たちにお語りになったときに、このように言い始めて、神の律法を説き明かされました。「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。(マタイ 5:17)」イエスさまは、律法と預言の成就そのものなのです。ユダヤ人指導者たちには、こう言われました。「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。(ヨハネ 5:39)」このイエスという方にあつて、旧約聖書全体が、すべて詰まっています。パウロはコロサイ人への手紙で、こう言いました。「こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であつて、本体はキリストにあるのです。(コロサイ 2:16-17)」本体はキリストにあり、律法はその本体の影です。ですから、ヨハネによる福音書は、「初めに、ことばがあつた。ことばは神とともにあつた。ことばは神であつた。(1:1)」と、イエス・キリストのことを書き始めています。そして最後の書物、黙示録は、「イエス・キリストの啓示」であります。この方は地上に戻つてこられる時に、「神のことば」とも呼ばれます。この方の啓示によって、新約聖書は終わるのです。

したがって、キリストが私たちにとって神の最終啓示であり、神の全体啓示なのです。この方の栄光こそが、神が私たちにお語りになりたい全てなのです。だから、私たちはキリストのうちにある者、これこそが全ての解答なのです。イエス・キリストご自身に全神経を集中させなければいけません。キリストがどのような本性を持っておられて、どのようなご性質があり、この方が行なわれたこと、また今行なわれていること、そしてこれから行なうことを、見ていく必要があります。この方が、神が終わりの時にお語りになる、媒体なのです。

1C 万物の相続者 2

そこでパウロはこう語ります。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。

御子は、「万物の相続者」です。すべての物を所有しておられます。この言葉には、詩篇2篇8節が背景にあります。父なる神が子なるキリストへ、「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。」と書いてあります。ヨハネ3章 35 節には、「父は御子を愛しておられ、

万物を御子の手にお渡しになった。」と書いてあります。父なる神から御子が全てのものを与えられています。パウロは、コロサイにある教会に対して、御子の相続を詳しく言い表しています。「なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。(1:16-17)」

このことを考えるとき、主が地上におられるときに、「心配してはいけません。」と訓戒されたことを思います。「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。(マタイ 6:26)」主は、ご自分がお造りになった鳥を指さして、弟子たちにお語りになっていました。「野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。(6:28-29)」イエスさまは、ご自分がお造りになり、また支配されている花を弟子たちに示して、お語りになっておられます。

そして、「御子によって世界を造られました。」とありますが、この「世界」は「世々」と訳すことのできる言葉です。数々の一連の時代、とこしえまで続く時代を御子が造られた、という意味です。「それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかに示しになるためでした。(エペソ 1:7)」時の初めから御子はおられ、存在するだけでなく、それぞれの時代を御子はすべて動かしておられました。その中で起こっている全ての時をキリストはご自分の栄光のために、まるでクラシック音楽の交響曲のように美しく編集しておられます。

イエス様は、ユダヤ人と議論された時に、殺されそうになりました。その発言は、ご自身をモーセに明らかにされたイスラエルの神の名、「わたしはある」と同一にされたからです。ヨハネ 8 章 56-58 節を読みますが、新共同訳のほうがはっきり表れているので、それを読みます。「『あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。』ユダヤ人たちが、『あなたは、まだ五十歳にもならないのに、アブラハムを見たのか』と言うと、イエスは言われた。「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」神が、モーセにアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であると言われて、その名をモーセが聞いたところ、「わたしは、「わたしはある」というものである。」とお答えになりました。これこそ、他の神々と天地創造の永遠の神を分ける名でありました。御子が、天地創造から人の歴史の変遷のすべてを支配して、動かしておられたのです。

2C 神の本質の現われ 3a

御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。

御子は、神のことを表している方ではありません。この方そのものが神であり、神ご自身の完全な現われです。まず「栄光の輝き」であります。神は昔、幕屋の中で、神殿の中で栄光を表されました。「そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕にはいることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。(出エジプト 40:35-36)」また神は、天の万象によって、地への働きかけによって栄光を表しました。エジプトに災いを下して、「これらによって、わたしがヤハウエであることを知らせる。」と言われました。キリストは、この神の栄光の輝きをもって現れました。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。(ヨハネ 1:14)」

そして「神の本質の完全な現れ」です。むかし預言者たちは、神にことについて語りました。ピリポが、イエスさまに尋ねました。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」すると、イエスはこう彼に言われました。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。」驚くべきことばです。イエスを見た者は、神を見えています。神が人のかたちをとって、今、ピリポの目の前におられるのです！彼らがイエスさまの肩に手を当てたなら、神の肩に手を当てたのと同じです。イエスとともに食事を取られたなら、神とともに食事を取っていたのと同じです。

そして、「その力あるみことばによって万物を保っておられます」と言っています。御子は、万物を創造し、万物を相続しておられるだけではなく、万物を保っておられます。今ある原子や粒子は、すべてイエスさまによって、それが保たれています。ペテロの手紙には、「その日が来れば、そのために、天は燃えくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。(2ペテロ 3:12)」と書いてありますが、イエスさまは、ご自分のみことばによって、このことを一瞬にしておできになります。なぜなら、今、イエスさまが意識されて、この天地万象の秩序を保っておられるからです。

3C 罪のきよめ 3b

また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

万物の相続者であり、創造者であり、また支配者であられる方が、人になり、仕える者の姿をおとりになり、そして最後は罪の供え物とされました。そして、十字架の上で流された血は、私たちの罪をみなきよめてくださる力を持っています。使徒ヨハネは言いました。「しかし、もし神が光の

中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ1:7)これは、実は、旧約時代の祭司による、いけにえの制度、牛や羊の血を流して罪の赦しを得るところから始まっています。そしてこれがキリストにあって完成したのだ、この方によってもはや動物のいけにえは必要なくなったことを、ヘブル書の著者は本書の半ばで詳しく語ります。

そして、主は、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれています。この「着座」されている、というところが大事です。というのは、それは、罪のきよめのため、救いのために必要なことはすべて成し遂げられた、ということの意味するからです。主は十字架につけられて、息を引き取られる前に語った最後のことばが、「完了した」でありました。人を救うために必要なことをすべて成し遂げられたので、主は、立ち歩いてお仕事をされるのではなく、座っておられるのです。「主は、私の主に仰せられる。「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでは、わたしの右の座に着いていよ。(詩篇 110:1)」足台にする、というのは、ご自身が地上に戻られて敵を服従させることを意味します。右の座、また右というのは力と権威を示しています。父なる神のあらゆる権威と力を付与されている、という意味です。

主はそのことをおできになるのですが、今は、この成し遂げられた御業によって、私たちの執り成しをしておられます。私たちの大祭司となられたのです。ヘブル人への手紙では、大祭司としてのイエス・キリストがずっと描かれています。

こうして、このヘブル人への手紙に書かれている、キリストの本質と働きのテーマとなっている部分を読みました。これらの事柄をただ見ていくだけで、私たちは、自分の信仰が不動のものとなっていくのに気づくかと思います。私たちが置かれている周りがあるもので、左右されにくくなっているのに気づくことでしょう。主イエス・キリストこそが、私たちが聞くべき、神のメッセージです。